



この物語は福島県浪江町の語り部 佐々木ヤス子さんが、2011年3月11日、東日本大震災直後から始まった避難行をつづった自叙伝「おそろしい放射能の空の下」を基に広島のみち物語制作委員会のメンバーが制作しました。



ナレーション: 避難1日目、3月12日

「しょうがない、かたづけっか」

キーイイ、ドン、バン

「婆ちゃん、早く逃げろ」

「早く逃げろって・・・なんだあ、そんなあわくって」

「爆発したんだ」

「爆発って・・・」

「現発、原発が爆発したんだ」

「そっそんなあ。原発が爆発したなんてありえないだろ。安全だ安全だとあれほど言っていたのに」

「ええから、とにかくぼっちゃんも逃げろ、車あるんだろ」

「あっああ・・・」

「津島活性化センターでまってから」

「あっああ・・・」



ブーン、パパッ、奥に詰めて奥に
「婆ちゃん、大丈夫かあ、まっけたぞ」
「ああ..すげえ車だなあ」
「次から次にやってくる。みんな双葉のもんだあ」
「爆発って、なんだあ」
「なんでも水素爆発らしゅうて」
「水素爆発って..なんだあ。原発が何で...水素が爆発すっだあ」
「オラもなんだか、さっぱりわからん」
「あっちさ行ってみるだ。テレビで原発のことをやってる見てえだから」



テレビ音声:「時分福島第一原発の第 号炉で爆発的事情があったとの報告がありました。」

「何いっているか、さっぱりわからん。シーベルトってなんだあ」

「どれだけ危険なんだあ」

「オラ原発で働いてっから多少分かるんだけど、20ミリシーベルトっていえば相当なものだあ。1時間もいたら癌になっぺ」

「ここはどうなんだ。ここには放射能は流れてこないのか」

「わからんよ。なんもわからん」

「エエから聞け、黙らんとテレビの声、聞こえんだあ」

放送「まだ非常食を取りに来られていない方は、早急に取りに来てください。残りが少なくなってきました」



④「おいメシ配られただあ。ほら、これ婆ちゃんのぶんだあ」

「あっありがとねえ」

「それにしても、この乾パン一袋が昼食とは、テレビでは見たことあっけど、まさか自分がこれを食うことになろうとは・・・」

「おら、特に腹も減ってねえし、この乾パン記念にとっとくだあ。どうせ直ぐかえれっだろう」

「婆ちゃん、これももっとけ」

「なんだあ」

「毛布らしいぞ」

「これで寝ろってことか」

「どうもそうらしいなあ。この寒空の中、毛布一枚とは」



「さむいなあ」

「婆ちゃん、こっちさこい。みんなで固まれば少しはあったけえぞ」

「うんだあ。あったけえ」

「……」

「でも、さむいなあ」

放送「避難されている皆さんにお知らせします。ただ今から夕食を配りますので、こちらの方に順序よく並んでください」

「婆ちゃん、オラたちがもらってきてやっから。まってろ」

「すまないねえ。赤の他人のこんな年寄りを、こんなに親切にしてもらって」

「気にすんなあ。困ったときはお互い様だ」



「婆ちゃん。さあ夕飯だ。当分、帰れそうにないから、ちゃんと食っとけよ」
「おにぎり一個にたくわん二切れにペットボトル1本かあ」
「このむすび凍ってカチンカチンだ」
「寒いもんなあ」



「むすび、これしかないぞ」

「そっだらいて、もらってないもんが、まだまだいっぞ」

「いいよいよ、みんなで分け合おうよ」

「そっだ、分けあえばエエ」

「さあメシ食ったら寝るべ。みんななるべく固まって寝ればちったあ暖かいだろう」



ナレーション: 避難3日目、3月14日

「原発があぶねえらしっぞ。皆また爆発すっでねえかといってるぞ」

「ほんとかあ。枝野さんは大丈夫っていってぞ」

「政府のいうことなんぞ、あてになるもんかい。俺たちこれまで何といわれてきたあ。原発は安全だあ安全だあっていわれて、こんなことになっちまった」

「神話だったんだよ。東電や政府の言う安全神話にオラたちみんな洗脳されていたんだ」

「こんど爆発したら福島どころか日本は終わりだろなあ」



ナレーション: 避難4日目、3月15日

「今日も雪だあ。青空みえてんのかなあ」

「婆ちゃん、ほら朝飯、今日もむすびだあ」

「この硬くて冷たいおにぎりもつれえなあ」

「しかたねえだあ。これしか食うもんねえだから。このにぎりもいつまであるもんやら」

「つれえなあ。この年になってこんなつれえ思いするなら、いっそ、あん時・・・」

※「皆様にお知らせします。午後1時に大型バス15台が来るのでそれに乗って移動していただきます」



「なんだ何があったんだ」

「わかんねえ。聞いてもなんで移動すうのか、どこへ行くのか誰もしらねえみてえだ」

「そんなことってあんのか」

「原発が爆発したんでねえか」

「また、また爆発したんだか」

「いやわかんねえ、誰かが言っていたような・・・」

「再度お知らせします。まもなくバスが入ってきます。早く荷物をまとめ移動できるようにしてください」



ゴーゴーごー

「すげえ数のバスだなあ」

「それにこの人たち…どこにいたんだ。町中の人々が非難してんのか」

「この辺の小学校や中学校、幼稚園に分かれて避難していた人みてえだ」

「こんなに逃げていたか」

「さあ早く乗車ください」

「どこに行くんですか」

「わかんないんです。私たち役場のものにも行き先は知らされてないんです。とにかく早く乗ってください。後がつかえています」



「……」

「……」

「……」無言の車内

「皆さん着いたようです。こちらでおりにいただきます」

「どこだあ、ここは」

「わかんねえ」

「二本松市……たぶん東和町だあ」

「すみません。どうもこちらではないようです。今一度バスに戻ってください。別の場所に移動します」



ナレーション: 避難5日目、3月16日

ちゅんちゅん(鳥の声)

「婆ちゃん寝れたかあ」

「んん」

「そうだよなあ。板の間に毛布二枚ひいただけだもんなあ。寝れるわけねえよなあ」

「あんたも80過ぎてんだろ。つらからうなあ」

「うんん、大丈夫だあ。それよっか、小さな子どもがかわいそうでなあ」

「そうだ、前にくばられたヨウ素剤を飲むか飲まねえかでなやんでたぞ」

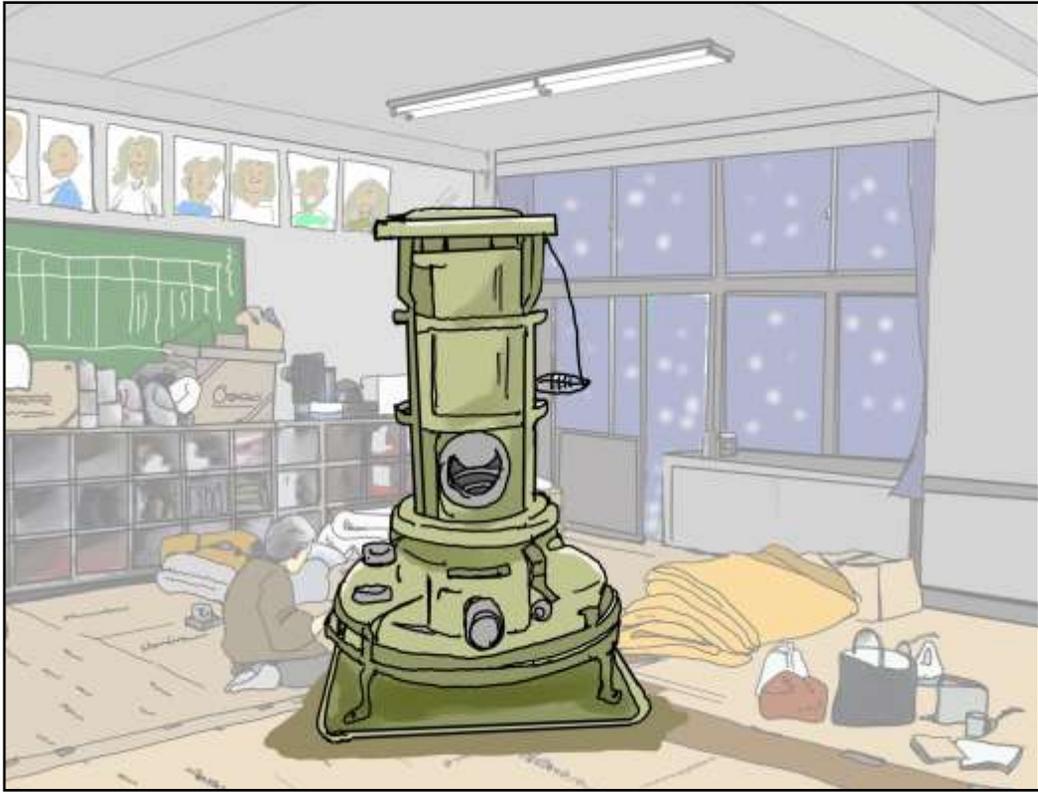
「年寄りはいいいけど、若いもんはなやむだらうなあ」

「なんでも副作用がひどいらしいぞ」

「医者の方もなく、飲むか飲まないかは自己責任だっというんだから酷いはなしだ」

「ストーブもろくない生活、いつまで続くんだらうな。2~3日で帰れると思っていたのに」

「そうだ、隣のひとがストーブ見つけてきたのはえかったが、すげえススで使いもんになんないし・・・」



「でも新しいストーブが配られるらしいぞ」

「そうだか、それはありがてえなあ」

放送「ストーブを配布しますが、灯油がありません。ストーブをつけるのは夜だけとし
日中は使わないようにしてください」

「なんで灯油がとどかねえんだ」

「何でもトラックの運転手が放射能を恐れて福島に入らねえらしいんだ」

「福島のもんは死ねってことだろう」



ナレーション: 避難6日目、3月17日

「うげーうげー」

「どうした大丈夫だか」

「ああ」

「顔真っ青でねえか。熱あるんだろ」

「ああ」

「病院につれていってもらっから」

「だいじょうぶだあ」

「大丈夫じゃねえよ。もう89にも何だから、無理すっでねえ」

「すいませんねえ」



ピーポーピーポー

「あのひと89だってなあ。食うもんもない布団もストーブもない中、ようがんばったなあ」

「風邪、はやり始めたなあ。ばあちゃん、大丈夫かあ」

「うん、ありがとう。ちょっと体がしんどいんで横にならしてもらうだあ」



ナレーション: 避難7日目、3月18日

「おーい新聞だ。新聞がとどいたぞ」

「くれえ、おれにも1部くれえ」

「まてそんな引っ張るとやぶれっでないか」

「おいおい見てみろよ、1号機から4号機まで全部やられてっでねえか」

「これぐちゃぐちゃだあ。中、みえてんでねえか。こんなんで大丈夫なはずねえ」

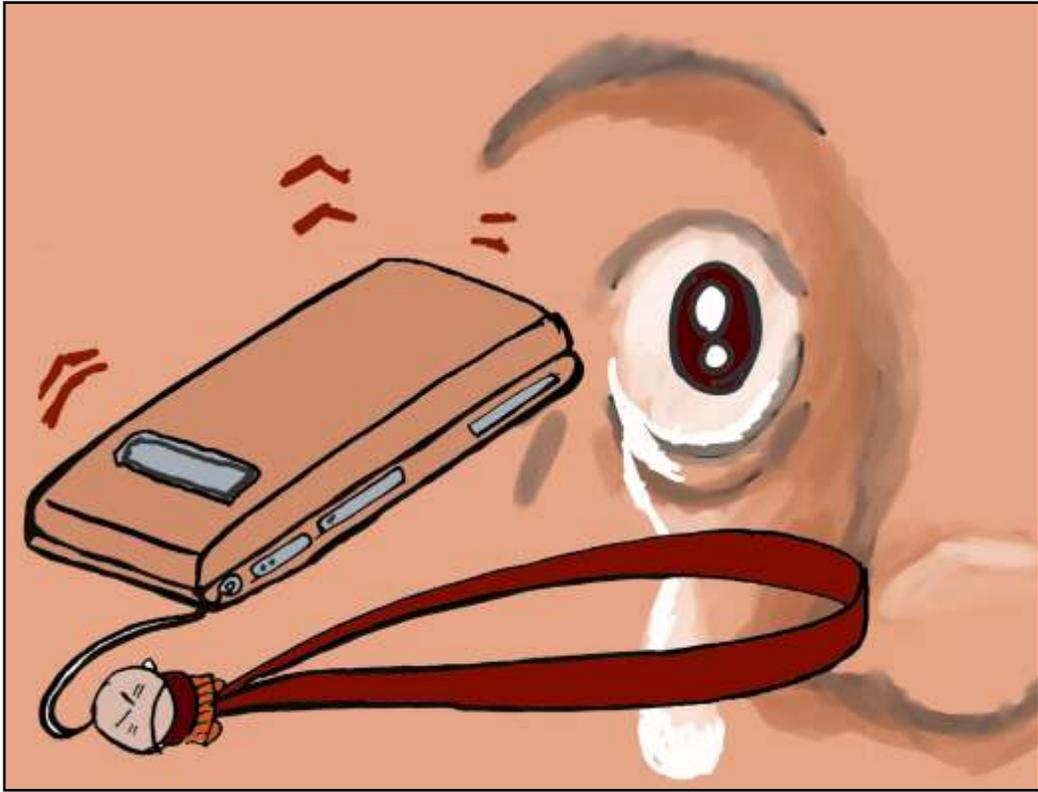
「マイクロシーベルトってなんだあ、ミリシーベルトより高いんか」

「わかんねえ」

「1000マイクロシーベルトが1ミリシーベルトだっけ」

「知んねえ。それがどうなんだ。大丈夫なんか、あぶないのか」

「これ見てみろ、中がみえてる。危なくないわけないだろ」



⑮ぶるるぶるる、かちゃ

「もしもし、もしもし」

「アツつながった。やっとながった」

「もしもし」

「母ちゃん、母ちゃん、私、長女の〇〇、大丈夫、心配してただあ」

「おまえは大丈夫かあ、東京も随分やられたんだろ」

「うん大丈夫。でも宏光がたいへんだったらしい」

「どうしただ」



「津波にのまれた」

「えっ！津波に、広光が津波にのまれたか。広光が死んだんかあ」

「大丈夫、大丈夫だあ。一旦は津波にのまれ死にそうになったらしいが、運良く崖にぶら下ってた葦(あし)につかまっていたところを助けられたそうだあ」

「死んでねえんだな、広光、死んでねえんだな。そうかありがとう。また電話すつから」

かちゃ

「…うっううう。ワーン、ワーン。生きてっか。仏様ありがとうございます。ご先祖様ありがとうございます。ワーン、ワーン」



⑩ぶるるぶるる、かちゃ

「もしもし、もしもし」

「アツつながった。つながった。もしもしヤスコ、ヤスコだ」

「ヤス子さんか、無事だったかあ。よかったなあ。いまどうしてんだ」

「今針道小学校に避難してんだ」

「針道って、二本松の針道か」

「うんだ」

「すまねえけど。ここ毛布1枚しかなくて、すまねえけど、座布団と毛布もらえんだろうか」

「すまねえ。直ぐにでも持っていきたいんだけど。ガソリンがなくて動けねえんだ」

「そうか、そりゃしかたねえなあ」

「すまねえ。本当にすまねえ。さむいだろうなあ。すまねえ、何とかもってってやりてえけど。本当にすまねえ。ガソリンさえ手に入ったら直ぐにいくからなあ」



ナレーション: 避難7日目、3月19日

「ばっちゃん、宅急便がとどいたぞ」

「オラにか」

「そうだあ。5箱も届いただあ」

「どっからだ」

「あっ！東京に嫁いだ娘と栃木にすんでいる甥や銘からだ」

「ばっちゃんは家族多いからエエなあ。おれ一人だから、どっからも来ないだろうな」

「みんなで分けから」

「本とか！そりやありがてえ」

「おいみんなばあちゃんが支援物資わけてくれるそうだ」



「キュウリに昆布、切り餅にたくわんもあんぞ」

「アルミホイルもあるし…ラップだ。ラップ、これがあるがってえんだ」

「おーい、こっちには芋だ芋、茨城のサツマイモだ。こりやうめえぞ」

「焼き芋作りはオラに任せてくれ」



「婆ちゃん！婆ちゃん！」

「あっ、繁、どうしたんだおめえ、どうやって来たんだ。昨日の電話でガソリンがねえって言ってたのに」

「あれからガソリンスタンドに並んだんだ。4時間ほどかかったけど、なんとかガソリンついでもらえてなあ」

「そうだか、そうだか。そんなにまで来てくれたかあ。ありがとね。ありがとね」

「ばあちゃん、泣くな。困ったときはお互い様だあ。それよかほら座布団に毛布。婆ちゃん針仕事や書きもんが得意だから針箱に便箋、封筒もあんど」

「ありがとね。ありがとね」

「だから泣くなって…なくなって、俺もなけてくつから…」



⑳「ゲンさん、この座布団もらってくれる」

「えっ！もらってエエだか」

「エエよエエよ、もらって」

「おれ一人だから…、家族もどこにいるのかわかんねえし、ありがたいよ。座布団ありがてえよ」

「エエよエエよ、座布団1枚で男がなくんでねえ。おーい、みんなあ。靴下あんぞ。いる人いねえか。もらってくれえ。男もんだあ」

「ばっちゃん、おれ一足くれえ。ここ一週間一度も履き替えてねえんだ」

「どうりで部屋がくさいと思ったよ」

「何言ってるんだ。臭いのはみんな一緒にねえか」

「ははっはははは、はははは」



23

ナレーション) 2011年3月11日東日本大震災で福島第一原発が破壊され、福島のみならず日本中に放射能という大きな雲が広がりました。

その雲は形もなく、色もなく、臭いもありません。つまり誰もその雲を実際に目にする
ことができないのです。

そして、その雲はいつ晴れるのか、雲がどんな影響をもたらすのか、誰も知りませ
ん。

誰も見えない、誰も知らない「見えない雲」はそこに存在し続けます。

ヒロシマも長く、昭和20年8月6日8時15分、その時、見えない雲におおわれました。

66年たった今、雲はなくなりましたが、今なお多くの方が、その影響で苦しんでいま
す。

我々は雲がなくなり、誰の心にも青空が広がることを信じ、その日が来るまで「見え
ない雲」の存在を忘れないよう、この物語を製作しました。

2012年6月22日、享年83歳、佐々木ヤスコさんは見えない雲の下でその生涯を終
えられました。冥福をお祈りし、この物語をささげます。